

## 巻頭言

# ごあいさつ

## 父、龍太郎の足跡を胸に

昨年、日中平和友好条約締結45周年という節目の年に、野田毅会長からお声がけを頂き日中協会の理事に就任をさせて頂きました。衆議院議員の橋本岳です。これから日中友好7団体の1つである、協会とともに歴史を歩むことができることを大変光榮に思っております。今後ともご指導のほど何卒よろしくお願いいたします。

さて、私自身が習近平中国国家主席に初めてお会いしたのは日中友好議員連盟のメンバーとして2014年の中国人民対外友好協会設立60周年記念大会に出席をしたときでした。「朋あり遠方より来る、又樂しからずや」という私たちにも馴染みの論語の一節から始まった習主席の演説は、中国における他国との友好交流の歴史を語り、今後もお重視する旨を述べた堂々たるものでした。陸のシルクロードや海のシルクロード（明の鄭和の故事を引きながら）を通じた交流の歴史にも触れられていました。

また、「鄭和はまったく領土拡大を望まなかった」とも付言し中国文化は常に平和を求めていた、と話されたことも印象に残っています。

父、龍太郎は我が国にとって、極めて重要な中国との関係をいかに発展させていくかを常に考えておりました。初めて訪中したのは厚生大臣として日本の沈没船「阿波丸」の犠牲者の遺骨と遺品の引渡式に参加をした1979年のこと。上海で行われた引渡式の前日には北京で銭信忠衛生部長（当時）と日中医療協力について原則合意をし、それがのちの中日友好病院建設に発展したとも聞いております。その後も、一政治家としてまた閣僚として度々中国を訪れたのは様々な懸案事項の解決に取り組むためでした。1991年、大蔵大臣当時、天安門事件後、西側先進国が閣僚レベルの訪問をストップしていた中で、先進国の閣僚として最初に中国を公式訪問したのも、

国際社会における中国の重要性、日中関係の重要性についての信念に基づくものだったのだと思います。

近年は新型コロナウイルス感染症の流行で対面をとまなう相互交流が困難な状況にありましたが、相互理解の増進のためにはやはり実際に会い、膝を付け合えた交流が必要で、日中両国は地理的に隣接しているが故に、様々な摩擦が生じることは避けられません。しかし、たとえ如何に困難な環境にあつたとしても、また、むしろ懸案があるときにこそ、両国で緊密な対話を行っていくことが重要であると実感しております。これからも日中協会の一員として、父、龍太郎を含め過去多くの先人達が道を切り拓いて来られたことを胸に、我々は、過去の重みを背負いながら、未来への責任と夢を作るために、各界の交流を更に促進し、ゆるぎない信頼関係を地道に積み上げていくよう努めてまいります。



理事 橋本 岳

衆議院議員